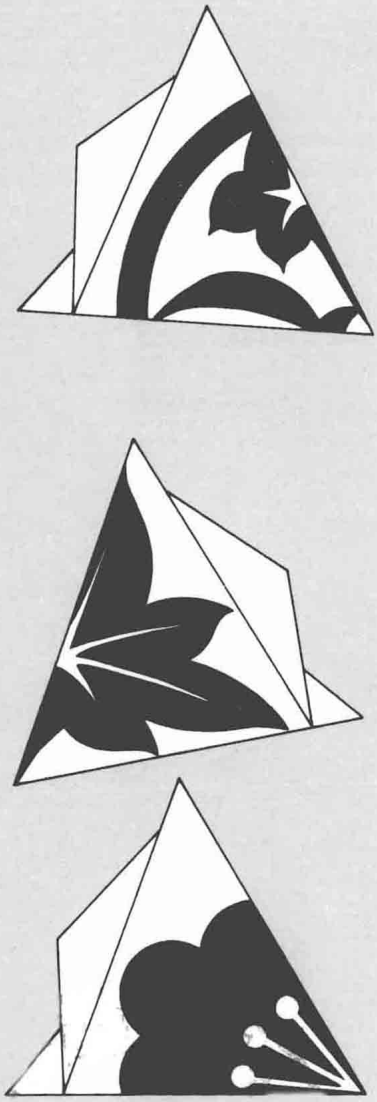
花小説・戯曲選

第二巻

岩波書店



鏡花小説・戯曲選 第二巻　第五回配本（全十二巻）

一九八一年一〇月二六日　第一刷発行

定価三五〇〇円

著者　泉鏡太郎

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三-二六五-四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・三陽社　製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 泉名月 1981　Printed in Japan

目　次

風流線……一
續風流線……三一
解　説……寺田　透……六二九

風流線

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

祝使　山駕籠　ふれ狀　橋の袂　急先鋒　芙蓉館　鞍ヶ嶽
異形のもの　綠の旗　手取川　邂逅　田舍酒　綾の鼓　妖
靈星　鶯籠　紫しらべ　革鞄の中　空薫　馬之部　みだれ
髮　うたがひ　浪裡白跳　寄手　禮ごころ

祝使

一

「あれ失禮、どうぞ此方へ。」

と座を讓つて、旅姿の身を片寄せた娘は、道中の風に亂れた、ばさ〳〵の銀杏返。たとへば靑柳の絲を洗はず、簪の花に露置かぬ狀ながら、耳許の淸らかな、目の涼しい、細面の、年紀の頃九か二十、類なく目に立つのが、赤毛布でくるりと身を、草鞋穿、脚絆掛、帶の端さへ露さないけれども、包み果てぬ色は洩れて、長き旅路を來たらしく、肩にも裾にも埃を置いたが、もみぢに霜の紅冴えて、視は濃な風情である。

床几にかけた腰とともに、小な風呂敷包と、蝙蝠傘を傍へずらした、店前に憩ふものは、唯此の一脚より多からぬ、田舍路の御休所。

老猫と瘦せた犬、鷄も居るけれども、客を待つ土間は凸凹の一坪半のみ。娘は先刻から憩つて

居たが、後れて入つて來た十五六の美少年。髪黑く、面白く、唇朱きが、おなじく草鞋穿、紺足袋に紺の脚絆、身輕に効々しく裝ふに、肩から斜懸に革鞄の、何を納れたのか一杯に膨らんだ胴中を、淺黃の紐で緊乎と結へた、重さうなのを腰下り。杖にもあらぬ手まさぐり、途すがら手折つたらしい、二葉三葉しをらしく殘つた柳の枝の、長くしなふのを、すら〳〵と縺れるやうに足を引摺り、草臥れた狀して鶴來(地名)の方から迚々と此の處へ。

敷居を越すにも疲れたらしい。重い歩を休めようとして見ると、一つの外はない床几に、先客があつたので、大人しく先づ挨拶をしたのであつた。

「私の方から申します處を、つい、うつかり傍見をして居たもんですから。」

あとは目でいつて向き直る、土間の前の土手下は、船もあらず人も無き、渺々たる一大河、礫原赤く洲は黃也。水は蒼く、瀨は白く、彼方此方に分流して、近きは龍の臥す如く、遠きは虎の躍るに似て、目も遙なる對岸は、恰も國が違つたやう、日中も黃昏の趣あり、一帶の靄の中を、人と馬とちらほらして、森低く、屋根小く、山仄に、描ける海市に異ならず。

然れば川幅約一里、鶴來といふ村は其處に。旅の娘が動かした瞳は、――恁る景色に見惚れたため、我にもあらず、聲を懸けらるゝまで氣が付かなかつた――心を示して、

「何うぞ、御遠慮なさらないで、お廣く在らつしやいましな。」と草鞋の上へ草鞋を半ば、底をか

へして、しなやかに足を重ねる。
「澤山です、澤山です。」
少年は妙齢の美人と、膝を交へるのを極り惡げに、づッと片端。
此方は人馴れた風采で、
「お婆さん、お客樣にお茶を上げて下さいな。」
「はい、はい。」
古板敷の筵の上、茶釜を前に、明りとりを逆に、故と暗い方に蹲つて、目に近々と覺束ない針の運び、夏のはじめから山國は、繼物に忙しい白髮の嫗、はじめて知つたか新來の客に、しよぼしよぼとした目を注ぎ、
「おや、入らつしやいまし。」
と又つくづく、床几に並んだ二人の姿、コリヤ何うぢや、傍の納戸の古襖に、先祖から貼つてある、大津繪から拔け出した、お若衆と藤娘か、七夕樣か、雛一對。

二

「難有う存じます。」と少年は茶碗を取つて、嫗よりは、美人の方に會釋する。

「どういたしまして、御挨拶で痛入りますこと。」
娘も又自分のものでも與へたやうに、故といつて、吻々、吻々々、眞珠を攔へた齒の皓さ、冷く燃ゆる唇の花は、一たび戰ぐ時祕曲を傳へて、上手の手が樂器の線に觸れたやう、人をして神往かしむるものであつた。何の祕密もなく輕い調子で、
「一寸、植物の採集にでもお出かけなさいましたの？」
まさに埃だらけの赤毛布を絡うた、其の風采を以てすれば、革鞄を肩に草鞋穿の姿を見れば、賣藥が賣れますかと問ふべきに、植物云々と尋ねられて、少年は思はず顏を視めたが、露も玉に、水も綠に映りさうな、無量の美なる意味の籠つた美人の瞳を一目見ると、何事を思ふ暇もなく、
「何、家から使者に來ました。」
「お使者に？」
世馴れぬ狀はいふまでもない。其の草臥れた樣子だけでも、餘り長途の使者である。
「だつて御遠方からぢやござんせんかね。」
少年は川向を、優しい目で見遣りながら、
「今朝から五里ばかり歩行いたんです。纔の途なんですが、草臥れて了つたんです。」
時に思ひついたやうに、背後を振向き、

「お婆さん、湖の處まで最う何のくらゐあるだらうね。」
嫗は目とともに口を開け、
「芙蓉潟でござりやすかの。」
「あゝ、然うさ。」
「はあ、あと最う二里半さござりやす。」
「や、二里半、未だそんなにあるのか。」
「もし、貴方樣は御城下かね。」
「あゝ、」
「それは御大儀ぢや、路が悪いで倍増し難儀しまするで、ゆつくり休んでござりませ。」
「お婆さん、何ぞ此の方が召食るやうなものはありませんか。」
「否、今橋向うの往還で、並木へ休んで辨當を食べました。何にも欲しくはないんだけれど、咽喉が渇いてしやうがなかつたから、お邪魔をしたんです。難有う。」
年紀にも似ない、いたいけさ、唯二つ三つの弟と思ふにさへ、抱いても遺りたいほど愛らしさうに、
「まあねえ、そんな遠くまで、何のお使者に行らつしやるの。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

少年は行儀よく膝に手を置き、
「御婚禮の祝儀に、つかひものを持つて行くんです。」
案外がな。
「おゝ！　御婚禮の。おめでたいのでございますね。それぢや御城下から、田舎の御親類へでも御遣はし？」
「親類ぢやありません、ともだちの方が縁附きました、其の人の許へ、姉さんが送るんです。」
「お姉様のおともだち、其の方がお嫁さん、あの、奥様なんですか。」
「えゝ、其處へ使者に參ります。」
「お嫁入のお祝ひに、貴郎のお使者。私もお姉様の、其のおともだちになりたいねえ、可羨いこと。」
と艶麗に打微笑む。

三

聊も隔てのない、打解けた美人の擧動、唯問はるゝにのみ纔に答へた少年も、此方より、ものいひかくる便を得たが、貴女とも姉さんとも申しかねた口ぶりで、

「ですが、あの、何處へ行らつしやるんですか。」
「私。」
「えゝ。」
「私は當なしの旅烏。」
娘は頤を襟につけて、打傾き、片袖を靜に拂ふと雪のやうな、指尖で、左の肩を細りと、赤毛布を輕く彈いて、
「妙な色の烏だこと、お國には、こんなのは居ないでせう。これは天竺の烏なの。」
「嘘を、天竺にだつて、阿蘭陀にだつて、烏の赤いのが居るもんですか。」
「だつて、こんな邊鄙にも、貴郎のやうな可愛らしい方が居るんですもの。然うすりや百里も離れた、私の方へ來て御覽なさい、赤い烏はいくらでも飛んで居ますよ。」
餘の事に笑ひ出して、
「嘘つこは止して、お國は何方。」
「眞個はね、東京。」
「東京？」少年は目を睜つた。此の邊の恁る年紀ごろでは、東都は十萬八千里、一種神聖なる天上界と思惟するので、さしむかひに居る自分は如何、五里の路に疲れたのに、年紀は上でもかよ

わい女が、何うして此處までと怪むなりけり。
夢見るやうに、
「大變ですなあ。」
「些とも大變なことはないの。最う二十里ばかりさきからは、汽車がありますからね。あとは目を瞑つて居ても行かれるんですよ。連れて行つて上げませうかね。」
「否、もつと修行をして、立派なものにならなければ不可ませんが、お嬢さん。」
少年は旅烏といふものを稱するに、今や令嬢を以てした。
「これから其の東京へ歸るんですか。」
「まるで、西東なの！　私は貴郎とは行違ひにお城下の方角でせう、向うへ行きます。鞍ケ嶽といふ山がありませう。」
「鞍ケ嶽。」
睫に近き一座の山、其の空ばかり雲暗き、五月晴の空を指して、
「あれ、あの山の續きで、此の川の水上ですつて。行つたことはありませんが、地理の本で習ひました。それでは鞍ケ嶽へ上るんですか、女ぢやありませんか。」
「何故ですえ。」

「だつて、此地方のものだつて、めつたに上るものはないんです。」
「でも、おともだちの御祝儀にさへ、貴郎は其の芙蓉の湖とやらへ、お使者においでなさるんでせう。私は良夫を尋ねて行くんですもの、何でもないの。」
「やれ、はあ、お前様、御亭主さ、天狗様か、魔物か。」
と嫗は唐突に頓興聲、目は疎いが、耳は然までにないらしい。
娘は背方へ手をついた、仰ぐやうにして、悠然と嫗を見遣り、
「ほゝゝ、烏の亭主に天狗は可いねえ。でも此方の色が赤いのだから、對手の鼻は低いかも知れないよ。」
「いや、鼻高様より可恐しい事がある。なか〳〵行かれるものではないが。」
納戸の破襖を半ば開いて、咳びた聲して言ふものあり。

四

二人が休んだ床几とは、左手に狹い、朽ちた緣側を隔てたばかりの、襖越に人の氣勢、お若衆と藤娘が其處を拔けて出たらしい、大津繪の古襖の破目に、ちら〳〵衣服が見えたのを、大方内の嫗に對する、尉殿であらうと思つたが、恁くて形を露したのは、非ず、年配四十有餘、商とも

見えず、工とも見えず、農とも見えない、面に大人の風あつて、身裝は山家を其まゝの、雜と是村夫子。

膝の前に、塗の禿げた茶盆を控へて、煙管を手に、胡坐、片手で撫でて居た百日紅の根をくりぬきの、煙草盆を押遣つて、緣側へ體を捻向け、

「はい、誰方も。これから唐突に御無禮しました。唯今鞍ケ嶽へ上らるゝといふを、襖越に承つたに就いて、お心づけ申します。はい、此の邊はな、見らるゝ通り、都に遠い山里で、峰は高し、樹林は深し、川は大いな。

此の手取川の淵一ツに、一ツづゝにしてからが十や二十の主は居ます。魔の棲まぬ處はないが、殊に其の鞍ケ嶽は總本家ともいふべきぢや。御婦人の身一ツで、なか〳〵行かれる場所ではない。けれども、天狗に許嫁があるやうに言はれるからには、其を恐れはなさるまい。其の事だけなら留めませぬが、能く聞かれえ。」

村夫子は煙管を差置き、

「今さしあたり草木も動かず、五月晴の上天氣、澄切つて秋日和見たやうぢやが、何と其の底に黑い雲が徐々と頭を出して、はや此の界隈、漁るものも耕すものも、寐心が穩でない。先々月あたりから、毎晩惡い夢に魔されて居るではないか。

それがといふとの、北から南へ三十里ばかり、間が切れて居る鐵道が繋がるで、工事が去年から始まつた處、いや其の工夫といふのがよ、大概つもつても知れること、今時そんな理窟はない筈ぢやが、百が九十九人までは、どれも無宿もの同然で、殺人に放火をかねた、夜叉羅刹ぢやと思はれい、はあ。

山は崩す、水は濁す、犬猫は取つて喰ふ、草は枯す、樹は倒す、石は飛ばす、取分けて目指されるのが、眉目形の勝れた婦人ぢや。

殺されたのもあり、死んだものもあり、好い衣服を着て帶をしめたのが、草の中に倒れて居たり、裸體で野原に曝されたり、何がさて、出來た鐵道の三里居まはり、手足な、髪な、ばら〳〵にして暴れ居つたわ。

何と可恐い、二條の鐵の線は、ずる〳〵と這ひ込んで、最うそれ、昨日一昨日あたりから此の川上で舌なめづり、丁ど貴女が行かれるといふ、鞍ケ嶽の麓は、鎌首を擡げる處ぢや、私の留めるのは此の事だで、はい。」

煙管を取上げ、流を斜に遠山の頂かけ、殺勢を示してぴたりと構へ、陰鬱な顏色して、

「見られい、今日のお天氣も、鶴來といふのに五位鷺が鳴きさうな空合ぢや、太陽樣はちやんと照らしてござるが、日中も蔭には闇があります。都と違うて邊土ぢやで、警察の手が屆かねば是

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com